

## 「密葬」の誕生

### ——公家社会にみる葬送儀礼の近世移行——

的場 匠平

公家社会における葬送儀礼は、古代から近世にかけての変容過程を文献史料に即して追跡することが可能であることや、近世天皇葬儀の特殊性・普遍性の検証に資するといった、葬送墓制史研究上の意義を有するとみられる。しかし、彼らの葬儀がいかなる近世移行を遂げたのかについては、これまでに十分な検討が加えられていない。本稿は、日本における葬送儀礼の具体的様相や葬儀観の近世的変容を、近世公家社会で行われていた「密葬」儀礼を素材として明らかにすることを目的としている。

「密葬」とは、遺体の移送と埋・火葬処理を、後日に行われる「葬送」儀礼に先んじて、内密の内に行うことであり、死亡日から「葬送」当日までの間隔が長期に及ぶ際に、遺体の腐敗や臭気の発生といった死体現象に直面することを回避するために案出されたものとみられる。この儀礼は、十七世紀初頭までには成立しており、十八世紀半ばには「密葬」という語で表現されることが一般化する。

「密葬」と類似した行為として、中世以前にしばしば行われていた「平生之儀」という遺体移送の作法があるが、「葬送」自体の秘匿・省略を意味しないことなどの点で、「密葬」は「平生之儀」とは異なる特徴を有する。そして、中世における「平生之儀」の流行と、近世における「密葬」の普及という変化には、葬送儀礼が有するステータスとして機能に、あまり価値を見出さなかった中世から、故人に相応しい威儀を整え、最適な日時を選んで葬儀を行うことが重視されるようになる近世へという、葬送儀礼に対する価値観の変容が背景として存在した。また、このような価値観の変容は、おそらく広範な階層で経験され、庶民における葬儀の華美化や、天皇葬儀の大規模化の基盤になったものと考えられる。